

# 長野東高校演劇部 2008年ダイアリー

## \* 2008年4月 部員がいなかった演劇部に新入生4名が入部。

3月にたった一人の部員であった3年生が卒業し、演劇部員はゼロ。廃部の危機のなか、4人の演劇未経験の1年生が入部し、新たな東高演劇部の活動が始まりました。当初の目標は東雲祭と北信大会での発表。大会は、制限時間60分のなかで、演技はもちろんですが、演出・舞台美術・音響・照明・衣装まで審査の対象となります。舞台用語も何もわからない状態から練習が始まりました。

## \* 2008年7月 東雲祭:『サバの缶詰』上演

東雲祭(文化祭)での上演脚本は『サバの缶詰』に決まりました。4月に赴任された顧問の清水信一先生が前任校で書いたものをバージョンアップして創り上げたものです。予算もほとんどないなか手作りの大道具、照明などで文化祭にのぞみました。会場も声が届きやすい会議室を使用しました。



ビールケースとコンパネで  
駅のホームを作る



工事用ライトとゴミ缶で作っ  
たスポットライト



### 【ストーリー】

メールの掲示板にイタズラ書きされ学校に行けなくなった女子高生と、両親の離婚問題で田舎の祖母の家に預けられた小学生が、廃線になった無人駅のホームで出会って、ちょっと前向きになるという、ひと夏の物語。

## \* 2008年8月 北信地区大会:(千曲市あんずホール)

### 『サバの缶詰』上演 金賞受賞 長野県大会出場決定

部員にとって初めての大会。母役が衣裳を忘れてしまうというハプニングもありましたが、大好評のうちに舞台が終了しました。照明・音響の裏方スタッフには、助っ人をお願いしました。その後の顧問会で長野県大会出場が決まり、部員全員びっくり。



**\* 2008年10月 長野県大会:(県松本文化会館)**

**『サバの缶詰』上演 優秀賞受賞 関東大会出場決定 創作脚本賞 優良賞受賞**

地区大会のときに講師の先生から指摘されたことを頭におき、新たな『サバの缶詰』をめざしました。著作権の問題で、原作にあった「カオナシ」(『千と千尋の神隠し』のキャラクター)を「なまはげ」に差し替えました。舞台美術では、電柱を制作、明かりも灯りました。電球の傘や取り付け方も見ていただきたいと思います。「しかごう」の駅名表示も本物らしく工夫しました。部屋の仕切りに使っていたパネルも撤去して、すっきりさせました。照明についても、長野県民文化会館の舞台課の方にさまざまなご指導をいただきました。大勢の皆様のご支援ご協力のもと、関東大会に出場することになりました。県大会出場を機にそれまで助っ人で応援してくれていた3名が正式に入部してくれ(いずれも他のクラブと掛け持ちですが)、7名になりました。

1年生部員だけでがんばっているとのことで、NBSの取材を受けました。県大会当日も取材がありましたが、思わぬ結果(優秀賞受賞)となり、NBSのスタッフの方にも喜んでいただきました。その後、関東大会出場ということで信濃毎日新聞・長野市民新聞にも記事を掲載していただきました。

**\* 2009年1月 関東大会(栃木市文化会館)**

**『サバの缶詰』上演 優良賞受賞**

地区大会発表が目標だった東高演劇部が関東大会の舞台を踏むなんて信じられませんでした。くじの結果、発表が最後(オオトリ)になってしまいましたが、思う存分の舞台ができました。さすがに関東大会の壁は厚く、全国大会出場はかないませんでした。作新学院をはじめ、他校の素晴らしい舞台に触れることができたのは大きな収穫でした。現地実行委員会の先生・生徒の皆様には本当にお世話になりました。

**長野東高演劇部 関東大会に初出場**



手作りの舞台で練習を重ねる長野東高演劇部の部員

上流するのは、顧問の清水信一と夏は物だ。親の離婚で田舎一教師が制作した『サバの缶詰』。〇二年に廃止された長野電鉄木島線の一四ヶ郷駅に着意を得た、無人駅が舞台の中心。

あさんとの対話をきっかけに

と夏は物だ。親の離婚で田舎一教師が制作した『サバの缶詰』。〇二年に廃止された長野電鉄木島線の一四ヶ郷駅に着意を得た、無人駅が舞台の中心。

あさんとの対話をきっかけに

指導歴15年 顧問が赴任 「楽しくて夢中に」

昨年八月の北信大会で上位二校、同十一月の県演劇大会発表会、優秀賞(二校)に選ばれ、関東大会出場が決まった。部の活動は、発声や演技を練習し発表するだけでなく、舞台装置を作ったりそのために資料を集めたりもする。「すべてが初めての経験。楽しく夢中になると部員たち。県大会後には女子生徒がさらに二人加入。現在部員は六人になった。

研究大会前の練習で、部員たちは声の出し方や間合、役者同士の息の合わせ方を細部を確認。「もう少し聞きたい」と「やりたくない?」と声を掛け合った。部長の田中佳さん(16)は「演劇を始め、想像力が広がった」といい、「大会では気取らず自分たちらしさを出したい」と話している。

研究大会には県内の松本緑ヶ崎高校(松本市)も出場する。

向きの気持ちに変わっていく。演じる四人は、いずれも高校生活にさまざまな演劇の経験がなかったアニア好きな女子生徒。当初は、文化祭と北信地区高校演劇合同発表会で十五年度の目標だったのが、十五年にわたって高校演劇部を指導してきた清水高樹の下で、発声や演技力を鍛えた。

信濃毎日新聞(2009.1.23)

